

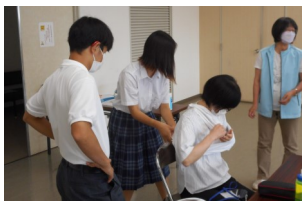
なごみん 8/17, 26

なごみんつながるプロジェクト2022

[イベントレポート]



- 協働先：県立岡崎聾学校、岩津地区婦人自主防災クラブ
- 総来場者数 51名 (うちボランティア38名)
- 地域の一員である岡崎聾学校と担い手不足に悩む婦人自主防災クラブの連携を生む接点を創出できました。また、婦人自主防災クラブへのアウトリーチによる「耳が聞こえない人に対して、有事の際にどのように接したらいいか悩んでいる」という情報を得て課題解決に繋がる機会を提供しました。
- 聾学校と参加者が双方の活動を紹介し、協働の機会を見つけれられる内容にしたことで、交流のみで終わらずに両者の活動促進につながる機会を創出しました。



やはぎかん

[職場体験学習受け入れ]

- 矢作北中学校2年生の生徒8名を職場体験学習として受け入れました。矢作公園WSをはじめ、様々な仕事の体験を提供しました。

むらさきかん

[ボランティアマッチング]

- 館内装飾や中庭草取りなど10月の1か月で総勢218名の方のボランティア活動をマッチングしました。

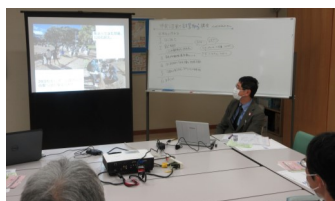
よりなん

5/14 組織マネジメント強化研修

6/11 ~市民活動いちから講座~

[イベントレポート]

- 総来場者数 98名
- これから市民活動をはじめようとしている方が参加し、課題に対する具体的なアドバイスができました。
- 公益活動を行う上で、団体が直面する課題を共有し、課題解決に向けた意見交換を行いました。その中で活動場所を求めている方がいたため、交流センターの事業の紹介や、公共空間を利用した活動場所の情報を提供しました。また、参加者からの情報提供もあり、参加者同士の関係作りにも寄与しました。
- 市民活動団体の登録可否に関わらず、コロナ禍による活動場所の減少があり、参加団体が活動場所を求めている声がありました。参加者の中には多くの協力者とともに新たな取組を企画しているという方もいましたが、思い悩んでいる方もいたため、交流センターへの相談ができるという周知を行うことができました。



悠紀の里

[施設案内・機能紹介]

- 六ツ美南部小学校2年生の施設見学の場を提供しました。

市民活動センター

[市民活動相談事例]

- 日本語が堪能ではない方が、日本語学校以外で談笑しながら折り紙など作品作りでき、かつりぶらで活動している団体さんを紹介してほしい。Loc職員のかたより
- りぶらで活動している団体を特定することはできないため、折り紙や絵手紙の団体をいくつかピックアップし、ご紹介。また、知上市にお住まいとのことだったので安城市民活動センターの所在地もお伝えしました。

まち育て推進チーム Pick UP!



矢作公園の未来を考えよう！ワークショップ

矢作公園の改修工事に伴い、市民の方を対象に全2回のワークショップを実施しました。1回目は、「こんな矢作公園になったらいいな」をテーマに参加者が自身の推し公園を紹介した後、矢作公園のいいところ、悪いところを改めて考え、アイデアを出し合いました。2回目では、前回のワークショップでたアイデアの中で、参加者がより強く希望することを投票により可視化。図面を使用し、より具体的な提案に近づけました。

お問合せ	よりなん	59-3600	むらさきかん	66-3066	市民活動センター	23-3114
なごみん	やはぎかん	33-3665	悠紀の里	57-5050	まち育て推進チーム	23-2888

まちのミカタ

Litaracy

2023.01 vol.119

発行・編集



特定非営利活動法人 岡崎まち育てセンター・Lita

〒444-0031 愛知県岡崎市梅園町3丁目6-6
TEL(0564)23-2888 / FAX(0564)23-2898
http://www.okazaki-lita.com/
https://www.facebook.com/okazaki.lita/

配布

岡崎市図書館交流プラザ・Libra / 岡崎市内の地域交流センター
会員宛へ郵送 等 ※会員登録をご希望の方は左記までご連絡ください。

配布協力

岡崎市役所各支所 / 岡崎市各市民センター / シビックセンター / FMおかざき / 杉くんの駄菓子屋 / 松應寺 / cafeくらがり

まちのミカタ

Litaracy

ーりたらしいー

119

2023年1月



特集

乙川かわまちづくり これまでとこれから

岡崎市は、2006年に旧額田町と合併したことにより、水源の森から矢作川に合流するまでの乙川流域全体が市域に含まれることになりました。そのため、治水・利水・親水など、川に関連する様々な施策や活動が一つの自治体で取り組みやすい環境が整ったと言えます。

2015年に始まった乙川リバーフロント地区整備に端を発した「かわまちづくり」により、水辺空間の有効活用から、乙川流域全体の魅力向上や課題解決に至るまで活動の対象が広がってきています。りたは、当初から乙川のかわま

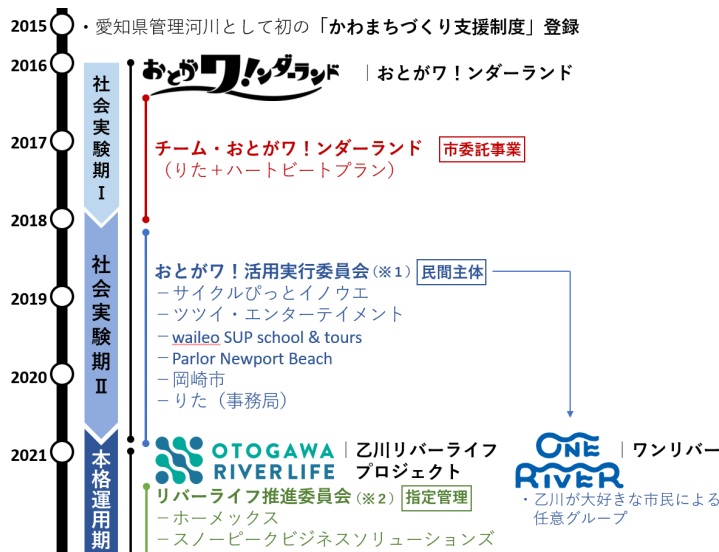
ちづくりに携わってきたことから、11月4日(金)、5日(土)に岡崎が会場となった「全国川サミット」のパネルディスカッションの企画・運営を務めました。今号では、乙川に縁の深い6名のパネリストの皆さんと話し合った「乙川のかわまちづくりのこれまでとこれから」についてご紹介します。

「全国川サミットとは…」一級河川と同じ名前またはその流域にある全国の市区町村が集まり、川と流域との関わりや次代に向けてのより良い川との共生の方向を探ることを目的として毎年開催されている。今回で30回目。

●「川の関係人口」を耕す乙川のかまちづくり | 第1部「事例発表」より

岡崎市の中心部を流れる乙川では、SUP、観光船、朝市、夜市、ヨガ、キャンプ、橋ふき、リパークグリーンなど、様々な活動を目にします。こうした風景は、いずれも6年前から始まった「かわまちづくり」をきっかけに生まれたものです。

2016年より、岡崎市の委託事業として、りたとハートビートプランが事務局となって、乙川の水辺活用社会実験「おとがワ！ンダーランド」がスタート。3年目からは民間事業者が主体となって「おとがワ！活用実行委員会(※1)」を設立し、乙川ならではの使い方や魅力を模索。計5年間の河川活用の社会実験期を経て、昨年度より本格運用期となり指定管理が導入されました(指定管理者は「リパーク推進委員会(※2)」)。また「おとがワ！活用実行委員会」メンバーを中心に、乙川を愛する有志による任意団体「ONE RIVER」を設立し、流域全体の魅力発信に尽力しています。6年間のかまちづくりで、上に触れた「新しい日常」の風景が生まれたことに加え、川に親しみ川を大切にする「川の関係人口」が増えてきたことが重要な成果だと言えます。



●川の関係人口を増やし公民一丸の「流域治水」へ | 第2部「パネルディスカッション」より

乙川の管理者である愛知県河川課の杉谷正樹さんは、気候変動に伴う水害リスクの増大に対して、公助には限界があり、自助や共助でリスク回避に努めなければならないと警鐘を鳴らします。

乙川上流部で暮らす唐澤萌さん(草木染作家/イラストレーター)は、農林業の担い手の高齢化が著しく、数年後には森や田畑の維持が困難になることが目に見えておりと指摘します。



▲桜城橋ふき/乙川河川敷での企業研修(ローカルワークツーリズム) 農林地が荒廃すると、大雨の際に雨水を一時的に貯留する機能が失われ、下流部の水害リスクが高まるのが危惧されます。

一方下流部では、額田産の木材が使われている桜城橋を雑巾がけすることで橋への愛着や上流の環境への関心を高める「桜城橋ふき(あいち橋の会)や、乙川流域の自然・歴史・文化・産業等の地域資源に触れ、地域の課題解決とビジネスの新たな着想につなぐ「ローカルワークツーリズム(スノーピークビジネスソリューションズ)」といった「川に関わる入口」が増えていきます。これらの経験をきっかけに流域全体への関心を高め、川でつながる中山間地と市街地が連携して、川の豊かな恵みや営みを守り育てる活動につなげていこうとする乙川の一連の活動は、現在国が力を注いでいる、流域全体で公民一丸となって水防に取り組む「流域治水」の考え方と重なっていると言えます。

●「行政任せ」のまちから、「自分ごと」のまち育てへ

上下水道が整備されていない集落に暮らす唐澤さんは、井戸から汲む生活用水の水質を自ら検査し、生活排水が直接川に流れてしまうため極力汚さないように心がけ、大雨が降ると近所の川が決壊しないか五感を研ぎ澄ませて警戒していると言います。岩ヶ谷さんはこの状況を「水質や水害のリスク管理が行政任せになっている下流部と対照的」であるとし、川と暮らしの関係を自分事としてとらえ、危機意識を正しく持つことの大切さを指摘しました。



▲左より泉さん、杉谷さん、村瀬亮さん(スノーピークビジネスソリューションズ)、岩ヶ谷さん、宮川さん(あいち橋の会)、唐澤さん

最後にハートビートプランの泉英明さんは、東日本大震災後に行政の定めた基準で巨大な防潮堤が一様に整備される被災地が多い中、リスクを負ってでも海との関係性を保つことを選択した気仙沼の事例に触れ、それを可能にしたのは、リスク管理を行政任せにせず「海との関係性を失うこと」と「災害リスク」を秤にかけて地域で合意形成したことだと紹介してくれました。

私たちの暮らしや生活環境の多くは公共の事業やサービス等に依存していますが、それが当たり前になると、何をどこまでやってくれていて、どこから自分たちでやるべきかを見失いがちです。そうすると、まちの将来像やそれを実現するための道筋などを自分たちで考えることが困難になってしまいます。乙川のかまちづくりでは、川と暮らしの関係性を再発見しながら、川(まち)の課題を人任せにせず、自分たちの川(まち)を自分たちで守り育てる実践の連鎖が生まれており、それこそがこれからのまちづくりの当事者を増やしていくことにつながるということを確信できたパネルディスカッションでした。

まちづくりトピックス【なごみん横丁】

今年度、各センターの事業は、新型コロナウイルスの感染対策をしながらではありますが、平常時に近い形でできるようになってきました。北部地域交流センター・なごみんでは、8月9日、10日の2日間で、3年ぶりに「なごみん横丁」を開催しました。

この催しは、小学生が大人に頼らず自分たちで考えて、まち(横丁)を運営していくというイベントです。子どもたちは、商店街に場所を借りて自分の店を出したり、工場や問屋、銀行などで働いたりしてお金(じゃん:横丁の通貨)を稼いだり、また、まちを良くするために「丁」内会活動をやったりして、社会のルールに接しながら、生き生きとまちづくりを楽しみます。このイベントは、特になごみん界隈の子どもたちにとっては、待ちに待った開催だったと思います。例年、一日450人程度の子どもの参加し、中高生などのボランティアを合わせると500人以上が動き回る、大変、密な催しなのですが、今年は、参加する小学生を、事前予約による200人程度までに絞って密を避け、また、開催期間も例年の半分の2日間にしました。規模を小さくしての開催なので、子どもたちには、ちょっと物足りなかつたかもしれません。

私は、2日間、受付を担当したのですが、参加の前後で子どもたちの様子が目に見えて変わること気づきました。特に低学年の子は変化が分かりやすく、見送りの保護者と別れて受付するときは、緊張や不安からか表情が硬いのですが、帰りには、皆、達成感に満ちた顔で意気揚々と迎えの保護者のもとに戻っていくのです。どの子も頼もしく輝いて見えて、子どもの持つ無限の可能性を感じることができました。りたとしては、こうした子たちが、将来、地域社会を担う人材になってほしいと願うばかりです。

また、子どもたちが安全に楽しく頑張れるよう陰から支えるボランティアさんもいます。光ヶ丘や商業、岩津高校、北中の生徒さん、りたからも各センターの職員が何人か出ていますが、今回、東海愛知新聞社さんが新聞の制作を、ナンブさんと花王プロフェッショナル・サービスさんが組んで薬局を、また地元の小幡建設さんと市民活動団体のさくらくらぶさんが共同で床材を利用した絵付け工房を、岩津地区婦人自主防災クラブさんが新聞スリッパづくりを、それぞれのノウハウを生かす形で、ボランティア参加してくださいました。岩津商工発展会さんやマルサンアイさんからは、暑い季節にうれしいお茶や豆乳をご協賛いただきました。企業さんの地域貢献活動として、こうした動きをさらに広められるよう、りたとしても、活動の輪を広げていきたいと考えております。(築瀬 鈴憲)



▲「これちょうだい!」「ハイ、10ジャンです!」



▲10じゃんで買った手作りストラップ。車のキーにつけています。



▲ボランティアさんたちとの反省会。

りた職員の思いを伝える! コラム②「未利用魚から社会課題をみる」

※今回は、阪口(=さ)と三矢(=み)の語り合いをお届けします。

さ: NHK「クローズアップ現代」で「未利用魚」を知りました。

み: 未利用魚?

さ: 数が揃わなかったり加工が難しかったりして、市場にあまり出回らない魚のことです。漁師が取った魚の3割は未利用魚になるそうです。私、未利用魚ではないですが、魚の「あら」を買います。「湯煮(塩をまぶした後、酒と湯で煮る)」をすれば美味しく食べられます。私は、そこに野菜を入れてスープにします。



み: 骨とか鱗で食べづらいんじゃない?

さ: 食べるのに手間はかかりますけど、安いし美味しいですよ。骨の周りの身が一番美味しいですから。

み: なるほど。りたの場合、「未利用の土地・建物(空き家)」をみんなで手間暇かけて活用することで地区を再生しますが、これはまちを「美味しくいただく」ことかもしれないですね。

さ: そうですね。地域交流センターでも「未利用〇〇」をテーマに、その背景にある社会課題を知る、考える機会をつくりたいです。